

もくじ

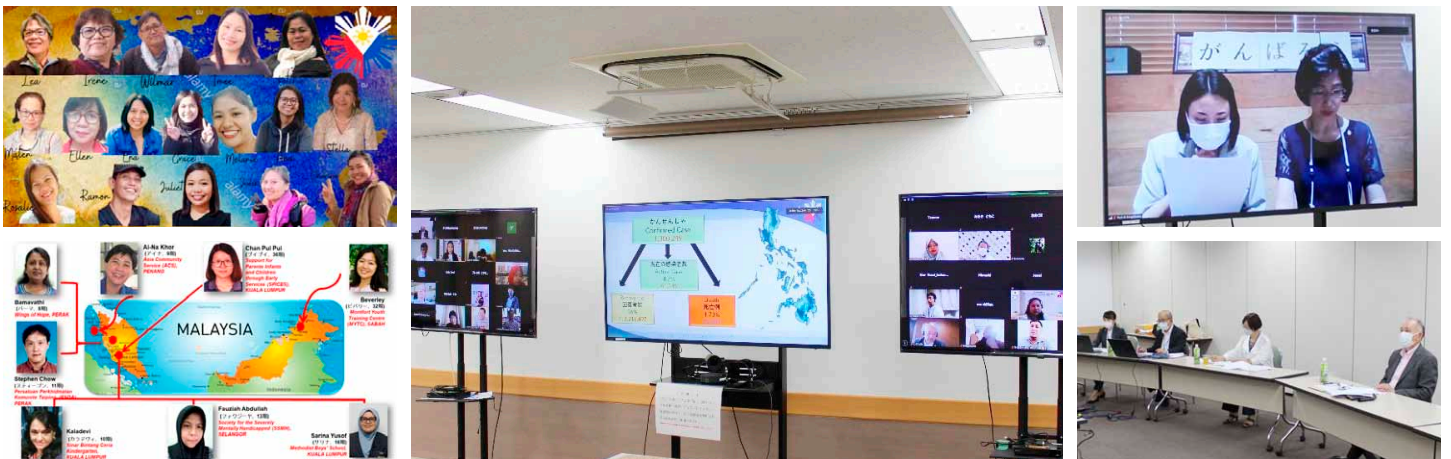
- P.1 第2回アジア社会福祉従事者研修・修了生とのオンライン交流会
- P.5 アジアのソーシャルワーカーとの日々 **新**
- P.6 2020年度修了生福祉活動助成事業報告①
- P.8 アジア社会福祉従事者研修、修了生フォローアップ研修について ほか

第2回 アジア社会福祉従事者研修・修了生とのオンライン交流会

6月30日、アジア社会福祉従事者研修の修了生と日本の社会福祉関係者によるオンライン交流会を実施しました。2回目の今回は、フィリピンとマレーシアはじめ、修了生33名（フィリピン7、マレーシア6、韓国2、台湾2、タイ2、スリランカ6、インドネシア8）のほか、日本から国際社会福祉基金委員会委員や国際交流・支援活動会員、研修関係者など、39名にご参加いただきました。

笹尾勝常務理事は冒頭挨拶で、「コロナ禍が1年半に及ぶが、オンラインでの交流の機会が持てるようになり、今後もこのようにオンタイムで交流が図ればよい。」と述べました。交流会では、修了生や研修関係者との間で、久々の再会を喜び合い、物理的な距離を越えた「つながり」を確認することができました。

各国修了生からの、コロナ禍における制約がある中での福祉活動や、さまざまな課題、今後の展望についての報告と、質疑の内容をご紹介します。



フィリピン

モデレータ



イメルダ(13期)

スピーカ



ジュリエット(36期)

マレーシア

モデレータ



アイナ(9期)

スピーカ



ピバリ(32期)



パイプイ(36期)

※写真は当日のZoom画面からキャプチャーしたもの。(修了生の敬称略)

フィリピン the Philippines



■ フィリピンの現状

2020年1月、新型コロナウイルス感染症の発生に加え、タール火山が噴火し、フィリピンは大きな打撃を受けた。2月にフィリピン初の死亡例が確認され、3月にコミュニティ隔離措置の発令により外出・移動制限が敷かれ、バヤニハン（相互扶助）法というコロナ対策法が成立した。10月11月には、3つの台風が到来し大きな被害があった。2021年3月からワクチンが供給されている。本年6月11日現在、累計感染者数は1,300,249人、死亡者は22,507人であり、陽性者は61,345人である。

■ 修了生の取り組み

● イメルダ（13期） セントメアリーズ大学

フィリピンの全国的な組織である「登録ソーシャルワーカー連合」（UNITED-RSWs）のオーガナイザのひとり。同連合は社会福祉開発省長官が承認し、大統領が臨席したタスクフォースに参画した。リーダーとして全国のメンバーと協力して、父親が自死した子どもや性的暴力の被害者など深刻なケースに対するケアを含め、オンラインによる心理的・社会的支援を実施している。

● エナ（34期） バハイ・トゥルヤン財団

ロックダウンに伴うコミュニティの封鎖により、収入が途絶え、寝泊りする場所も確保できないホームレス家族に対し、住宅、生計、食料の支援を行った。これまでの支給は7,388件に上る。今後の課題は、新型コロナウイルスによる精神的ストレスやトラウマに対するケア、金銭管理リテラシー教育、健康保険および小口貸付利用のための組合に加入することである。

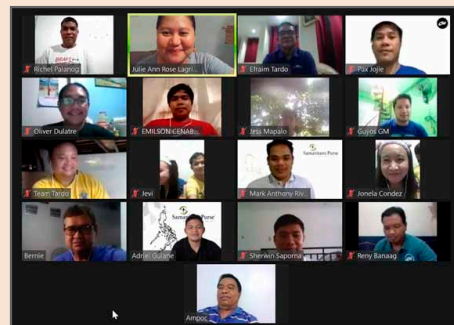


● ジュリエット（36期） フィリピンソーシャルワーカー協会

パンデミックにより増加した心理的問題にソーシャルワーカーが適切に介入するための研修をオンラインで実施し、434人のワーカーが受講した。さらに精神的支援グループを立ち上げた。また、自身で編成したボランティアグループでは、失職、減収した人や家庭に対して、状況調査や移動食料提供（Community Pantry on Wheels）を実施した。

● ジュリ（32期） サマリタンズ・パース

2020年4月、フィリピン政府はロックダウンに伴う孤独と孤立による自殺、メンタルヘルス問題への対応協力を教会に求めた。所属団体は、全国のワーカー106名にカウンセリングに関するオンライン研修を実施し、3,000人以上への「テレセラピー」と、8,000人以上への「危機における神の希望」の共有を行った。



● カッチ（17期） クリブス財団

人的な課題としては、ボランティアが施設に入れなくなったほか、7名のスタッフが新型コロナウイルスに感染した。資金面では、現金や物品の寄付が激減し、新規の資金源の開拓も困難となった。サービス提供面では、移動制限により活動ができないこと、オンライン機器の不足やインターネット接続問題が課題となった。そこで、Zoom等を用いたボランティアや専門家との会議、コスト削減策の検討、カウンセリングやセラピーを対面・オンライン家庭学習を組み合わせるなどして対処した。

● ウィルマー（23期） KSEM 路上教育プログラム・デイセンター

路上で生活する家族や子どもたちは、政府の支援を受けることができない。そこで、物資、医療、教育および心理的支援を提供した。また、そのような親たちはオンラインを利用して子どもたちの学習を指導することが難しい。オンラインの活動に適応するため、生活技能、健康関連のセッション、価値観の育成などの活動をオンラインで取り組んだ。



マレーシア Malaysia



■ マレーシアの現状

多民族国家のマレーシアでは、春節やラマダン（断食）など宗教的な文化行事が多く、大人数の会食が各地で開かれたこと、政権交代や選挙による人の移動が重なったことにより、感染が急拡大し、現在も厳格なロックダウン状態が続いている。修了生の働く施設や学校も封鎖され、活動に大きな影響を及ぼした。都市部と異なり、地方ではインターネット環境が整っておらず、オンライン活動が困難な地域もあった。また、チャリティバザーや募金活動の中止、寄付金の大幅減により、職員の給与も影響を受けた。

■ 修了生の取り組み

● アイナ（9期） ACS*

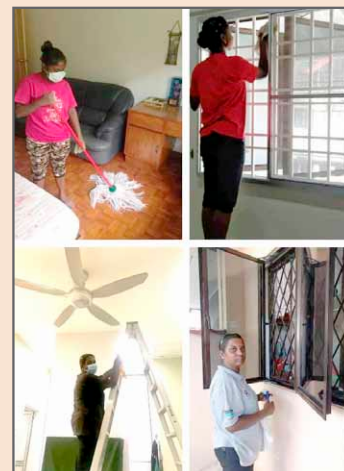
所属団体は障害者・児の支援が専門であるが、コロナ禍での支援として、生活上の困難に直面している人や外国人労働者を対象に、食用油、卵、牛乳などの食品配布を行った。また、教師やセラピストが、子どもの活動について親とビデオ通話を用いて話し合いのアドバイスを与える療育オンラインセッション、利用者がコロナ禍においても働きつづけられるよう、全社協の助成金で購入した手織り機を自宅に持ち込んで在宅勤務を実施した。



*Asia Community Service

● スティーブン（11期） ESDA

タイピン市の失業者の新たな雇用機会として、ハウスクリーニングチームを創設した。Facebook や新聞に取り上げられたことで顧客が増え、失業者は十分な収入を得ることができた。2021年1月、企業や工場が操業を再開し、失業者たちが職に就いたため、チームは解散した。



● ビバリー（32期） モンフォート青年研修センター

オンラインでレッスンを実施するために WhatsApp グループを作ったが、中にはインターネット接続のため山のふもとから頂上まで歩く必要がある利用者もいた。2週間に1回利用者宅に電話し、学習や家族のようす、気持ちが落ち着いているか等を確認した。財源づくりとして、職員と利用者で作成したクリスマスビデオを YouTube に投稿し、寄付を募った。

● プイプイ（36期） SPICES*

毎週1回のメール、電話や Zoom でのフォローアップ、オンラインでの療育サポートを行った。多くの家族が経済的困難や子どもの行動上の問題に直面していることから、子育て体験を共有でき、他の保護者から意見を聞ける Facebook の保護者サポートページを作成した。

*Support for Parents, Infants and Children through Early Services

● カラ（10期） シナー・ピンタン・セリア幼稚園

長く幼稚園が閉鎖されている間、収入が大きく減った家庭が多く、幼稚園が再開した時、半数以上の子どもが通園できなかった。学費や寄付金の減少に伴い、職員の給料が減少した。子どもにとって自宅学習は集中しづらく、保護者の負担増や、使用できるスマホが1台しかない家庭があることから、毎日収録した映像を送るなどして、子どもと保護者がオンラインで授業を受けられるよう工夫した。

● フォージア（13期） SSMH*

保護者は、自宅での子どもの活動の様子をビデオ撮影して送り、教師とセラピストは、Zoom や WhatsApp でのビデオ通話で親と話し合い、適切な運動を指導した。財源づくりとして、マレーシアに生息する鳥についての本を作成し、販売した。



*Society for the Severely Mentally Handicapped

● バーマ（8期） ウイングス・オブ・ホープ

所属施設が6か月間閉鎖された間、職員は子どもたちに復習用の課題を送った。また、生徒へのカウンセリングや、子どもとの関わりに悩んでいる保護者相談にも応じた。

質疑応答

オンライン

- Q** オンラインでの活動のように、コロナを機に新たにできるようになったことはあるか？
- A** オンライン活動のおかげで保護者とのコミュニケーションが増え、親が自分の責任を自覚するようになった。施設ではオンライン用のビデオも作成したので、コロナ後もオンライン活動を続ける。(パイパイ/マレーシア)
- Q** オンラインサービスに関して、ハードウェア・ソフトウェア上の問題や、利用者・ワーカーにとっての課題は？
- A** フィリピンのソーシャルワーク教育では、学生、教員あるいはワーカーもテクノロジーの使い方について学ぶ。専門的な訓練を受けた者たちが現場で知識や経験を分かち合い、仕事に生かしている。(イメルダ/フィリピン)
- A** 対面サービスの時は、ACSには80人の子どもたちがいたが、1年間のオンライン活動ののち、半数以上の利用者を失った。インターネットの接続が悪かったり、スマホやタブレットの台数が少なく、兄弟が使うと自分が使えないなどがその理由である。(アイナ/マレーシア)

民間活動

- Q** スリランカでは新型コロナウイルスの対応は政府や病院が扱っており、民間はまだ関わりをもっていない。フィリピンではNGOや民間がコロナの問題に関与できているのか？
- A** フィリピンでは多くのNGOや民間セクターが、パンデミックに対応するために政府と協力して働いている。海外からのワクチン確保にも動いている。(イメルダ/フィリピン)

ワクチン

- Q** 韓国のソーシャルワーカーはすでにワクチン接種を受けられたが、フィリピンではどうか。
- A** ワクチン接種は遅れている。医療従事者やソーシャルワーカーなど最前線で働く人々が優先だが、まだ全員には行き渡っておらず、高齢者もまだである。接種対象は、現在ではレストランで働く人々を含むエッセンシャルワーカーにまで拡大されている。年末までに国民の75%への接種完了がフィリピンの目標である。(カッチ, イメルダ/フィリピン)
- Q** インドネシアではワクチンを拒否する人たちがいる。フィリピンやマレーシアの政府ではそのような人々にどのような対応をしているか？
- A** マレーシアでは主として宗教的な理由からワクチン接種に懐疑的な人や、高齢者の中にはわからないものを注射されることを警戒する人もいる。マレーシア政府は義務としてワクチン接種を進めようとしているが、うまくいくとは思えない。権利の問題でもあるので、人権活動家らの反対もみられる。(アイナ/マレーシア)
- A** 私が住むタイピン市では、保健当局が高齢者の家を訪れ、個別に接種を行っている。NGOも協力している。所属施設でもワクチン接種のために施設を開放、提供する予定。障害者のうち何人がワクチン接種を希望するかによる。(スティーブン/マレーシア)

参加者からの声

- フィリピンやマレーシアのソーシャルワーカーが、コロナ禍の制約がある中でも創意工夫（特にICTの活用）により実践を展開していることに、同じソーシャルワーカーとして力をもらった。
- どのような形であっても繋がることの大切さを再確認した。
- 修了生の皆さまの活動を進めることが希望につながる。安全・安心を配慮しながら活動を進めてほしい。



※交流会のプレゼンテーションは動画でご覧いただけます。(P.8 参照)

アジアのソーシャルワーカーとの日々

「アジア社会福祉従事者研修」の中心プログラムである施設研修を受け入れてくださっている社会福祉法人・施設の皆さまより、研修を通じて感じたこと、国際交流についてのご意見などを綴っていただきます。



釜島 豪頭

社会福祉法人 東京栄和会 なぎさ和楽苑
地域福祉推進課 地域連携推進係

「アジア社会福祉従事者研修生を受け入れて」

当法人は、アジア社会福祉従事者研修が開始された1984年より東京都江戸川区にある「なぎさ和楽苑」にて施設研修の受け入れを開始し、これまでに7か国から30名を超える研修生を受け入れてまいりました。

本研修の受け入れは、当法人の創設者である平方俊雄前理事長の「少しでもアジア全体の社会福祉の発展と向上に寄与したい」との強い想いが原点となっています。

研修生を受け入れることによる施設への効果の中で特筆すべき点として、“福祉人としての志”と“異文化交流の意義”を再認識できるということが挙げられます。「母国の社会福祉発展のため」という強い使命感の下、新たな学びを得ることに一切の妥協をせず、異国の地で挑戦し続ける研修生の飽くなき向上心に触れた時、これこそが“福祉人としてのあるべき姿”であることに、私たち職員も改めて気づかされます。

また職員が研修生と関わる中で、日本だけに留まらずアジア全体の社会福祉の現状に関心を持ち、多様性の尊重や多角的な視点が養われ、それが社会福祉の原点でもある“豊かな人間性”の醸成にもつながります。異文化に触れることのできる本研修によって、職員一人ひとりが新たに学び、そして成長させていただける貴重な機会となっています。

一方、受け入れ施設として忘れてはならないのは、研修生

の個性性を尊重することです。母国の置かれた実状、また研修生の専門分野や研修目標が異なるため、一人ひとりのニーズに合わせた研修プログラムの開発が重要であるのはもちろんのこと、できる限り多くの、心に響く学びや体験が得られるような環境整備も重要であると考えています。そのために当法人では、研修の目的を職員全員が相互に理解し、常に研修生の想いに応えられる“研修生ファースト”の意識を忘れずにこれからも受け入れを行ってまいりたいと思います。

研修後に母国で活躍されている研修生からの報告は本当に嬉しく、そして頼もしく、受け入れを継続的にやってきた施設冥利に尽きる思いです。社会福祉事業は人と人とのつながりがあってこそ成り立つものであり、本研修はその第一歩であると考えています。これからも研修生とのご縁を大切に、鈴木理事長・なぎさ和楽苑池田苑長とともに日本とアジア各国との懸け橋となる人材の受け入れを積極的に推進してまいりたいと思います。

新型コロナウイルス感染症の一日も早い収束と本研修の一日も早い再開を心より願っております。



なぎさ和楽苑職員とギョンホさん
(韓国・36期)



平方俊雄前理事長とアニサさん
(インドネシア・35期)



北村 充

社会福祉法人みねやま福祉会
法人本部総務部総務課 課長

「小さな関係を繋いで広がる世界」

1. 施設研修の受け入れを決めた理由

全国社会福祉協議会の当時の担当の方から理事長に依頼があり、二つ返事で受け入れが始まりました。また、電話だけでなく担当の方がわざわざ東京から京都の日本海側まで来られたと聞いており、そのことも依頼をお受けした理由の一つではないかと思っています。そして、初めて実習に来られた台湾の方より、実習を終了されてから「実習で学びを得られた」という喜びの声を聞かせてもらったことから、2回目も受け入れることになり現在に至っています。

2. 施設研修の受け入れを経験しての感想

言葉の違いについて受け入れまでに不安があったものの、実際に研修が始まると、日本語の勉強を経て上手に話することができる方もありましたし、あまり上手ではない方でもそれなりに通じたことから、受け入れに対する不安は少しずつ減りました。宗教上の理由から食事の制限があるという点も不安でしたが、一つひとつ確認することで不安が減ってい

き、知ることの大切さを改めて感じました。

3. 施設研修を通じて法人施設として得られたもの

実際に来てもらうと、研修生の母国に対しての福祉環境や文化などへの関心が高まり、それを教えてもらうことで、今度は自分の国ではどうなのかといった新たな興味や気付きに繋がりました。

また、研修実施要綱の施設研修“主な研修内容”に“利用者や職員の活動だけでなく、交流の機会をとらえて日本の福祉関係者との信頼関係、友人関係を築く”とあることから、研修の時間だけでなく休日などの日常を一緒に過ごすことで、信頼関係が深まったと実感しています。研修が終了し、母国へ帰られたあともお互いの仕事に関心をもち、援助しあったりプライベートでの交流も続いています。



地域の祭りに参加するファンさん
(台湾・32期)



施設長から説明を受けるイマさん
(インドネシア・36期)

2020年度 修了生福祉活動助成事業報告①

本事業は、アジア社会福祉従事者研修修了生が行う社会福祉事業等への助成を通じて、アジアの社会福祉の発展に寄与することを目的に実施しています。1997（平成9）年から毎年実施しており、現在は、公益財団法人日本社会福祉弘済会、公益財団法人毎日新聞東京社会事業団の助成および本会の国際社会福祉基金を原資に助成を実施しています。これまでの実績は、8か国、延べ184団体、総額約5,470万円となっています。

2020年度は、4か国10名の修了生の活動に助成しました。中には、新型コロナウイルス感染症の影響で、内容を一部変更したプロジェクトもみられました。本号では、3事業の概要について報告いたします。その他7事業は、次号以降でご紹介いたします。

「社会福祉や社会開発分野の 組織で働くスタッフの能力開発」

ソムチャイ（4期・タイ）
社会開発促進ボランティア協会（VDA）



タイでは、2020年5月末まで非常事態宣言が発出され、夜間の外出禁止、県境をまたぐ通勤の制限、大規模集会の禁止などが課されていたため、事業の開始を8月に変更しました。

社会福祉および社会開発のために働いているNGOの職員のほとんどが、食生活や休息、睡眠時間、定期的な運動が不十分で不健康な生活を送っている現状がありました。そこで、働きざかりの中堅のスタッフを対象に、自身の健康と、ソーシャルワーカーとしてのスキルの向上を目的とした研修とセミナーを行うワークショップを行うことにしました。

1回目のワークショップでは、参加者による自己健康評価や栄養バランスのよい食事についての研修や個別相談を行いました。セミナーでは、社会開発および社会福祉におけるネットワークの重要性について学びました。事後アンケートによると、約80%の参加者がさらに生活の質を上げようという意識をもちました。

2回目のワークショップでは、「幸せな身体と心を作れます」と題して、健康的な生活を送るための知識や、心身の幸福に関する研修を行いました。セミナーでは、新型コロナウイルスについても学び、世界的なパンデミックの概要や、タイにおける社会福祉への影響、コロナ禍およびポストコロナにおけるNGOの役割を学びました。事後アンケートによると、約75%の参加者がコロナ禍におけるNGOの役割およびNGOスタッフとして働く方向性について理解しました。

ワークショップを通じ、参加者/団体同士のネットワークを広げることもつながり、SNSを介した協働をスタートさせることができました。スタッフが心身ともに健康であって初めて支援を必要とする人びとのために働ける、というスタッフ自身の気付きはとても重要であり、今後もこの気付きを育てていきたいと思えます。また、本プロジェクト実施団体は、サービス提供者と利用者との「架け橋」として、また様々な分野における関係者たちの「プラットフォーム」としての役割を果たし、これからもタイにおける社会開発および社会福祉を推し進めていきます。



ワークショップの様子



講師を務めるソムチャイ氏



ワークショップ参加者

※ 各事業の様子を収めた動画『アジア各国でエッセンシャルワークに取り組んでいます』を公開しています。（P.8 参照）

こちらから
ご覧いただけます



「地域と障害者のための 新型コロナ予防プログラム」

ナンダン (23期・インドネシア)
サウダラ・セジワ財団



本プロジェクトは、当初は災害等非常時の障害者対応に関する事業内容として申請されましたが、インドネシアでの新型コロナウイルスの急速な感染拡大を踏まえ、障害者の感染予防を行う事業内容へ変更されました。活動地域で生活する障害者は、新型コロナウイルスの予防に関する情報、保健サービスや学校における安心安全が保障されていない状況にあり、危険と困難に直面していました。そこで、地域および障害者に対し、新型コロナウイルスへの感染を予防するための支援を行いました。

まず、特別支援学校や地域住民の住宅に消毒液を噴霧する作業を定期的に行いました。そして、感染予防に関する正しい知識を提供するため、誰もが理解できるようわかりやすいチラシやポスターを配布しました。また、オンラインで感染予防に関する情報発信を行いました。さらに、地域の障害者や高齢者に対して、食料・マスク・手指消毒剤などの不足している物資を提供しました。正しい情報をわかりやすく提供することにより、新しい生活様式に適應しようとする地域住民や障害者の意識の変化がみられ、新型コロナウイルスの蔓延を防ぐことができました。

新型コロナウイルスのパンデミックは、依然として続いています。今後も地域の子どもたちや高齢者、障害者など何らかの支援を必要とする人びとに対する支援や保護を継続し、感染拡大を防ぐために活動していきます。



噴霧作業を行うトレーナーたち



緊急援助物資の提供

「グリーン・ファミリー フェーズ2 (持続可能な農業を通じた自給自足の生活)」

ニラーニ (5期・スリランカ)
シッタールタ児童発達財団



「グリーン・ファミリー」の背景として、農業に依存する農業が根本原因となり、土壌劣化、健康被害、保健コストの上昇、貧困の拡大、病気の親に代わり子どもたちが学校に行かずに働かざるを得ない、時には反社会的行為に手を染めるといった悪循環がありました。これを断ち切るため、有機農業を浸透させ、人びとが健康的な生活をおくることをめざすとともに、これからの社会を変える推進力となる子どもたちを関わり、次世代を担うリーダーの育成をめざしました。

本年度は、子どもや女性を対象に、地域に根ざしたリーダーを育成するための研修やワークショップを行いました。農業の悪影響や有機肥料の作り方のほか、チームワークや問題解決について学び、その知識はリーダーから地域住民に広まってきました。

地域の高齢者や住民の健康づくりにも取り組みました。家庭菜園の作り方や種子についての研修、調理方法の実演、子どもたちが自分で集めた新聞記事を利用し、家庭菜園と環境保護の成果をまとめた本を作成するワークショップを行いました。また、活動地域には多くの腎臓病患者が生活しており、悲観的な感情を取り除き、希望をもってもらうためのプログラムを計画しました。腎臓病患者は新型コロナウイルスに過敏になり、参加を望まなかったので、患者の家庭の子どもたちを通じて、家庭菜園活動への参加を呼びかけたところ、腎臓病患者が家庭菜園に楽しく関わっているとの報告があり、プログラムの代替となる活動ができました。



リーダーが教える様子



図書館で農業の本を調べる様子

アジア社会福祉従事者研修、修了生フォローアップ研修について

アジア社会福祉従事者研修および修了生フォローアップ研修は、新型コロナウイルス感染症の終息が見込めず、依然として各国からの招へいが困難であること、日本国内の社会福祉施設等においても引き続き厳格な感染予防対応が講じられている状況を踏まえ、令和3年度も中止といたしました。

来年度の研修実施につきましては、国内外におけるワクチン接種の推移など、今後の感染症の状況を踏まえて時期や内容を含め検討いたします。引き続き本研修事業へのご理解、ご協力をお願いいたします。

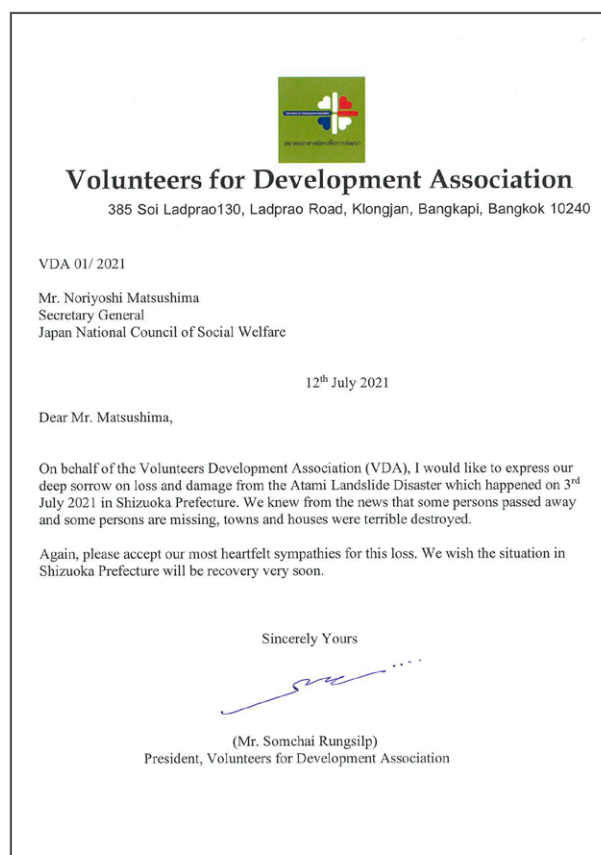
令和3年7月伊豆山土砂災害へのお見舞い

令和3年7月3日に、静岡県熱海市伊豆山地区で発生した土砂災害に対して、アジア社会福祉従事者研修修了生のソムチャイ氏（第4期／タイ）が代表を務める修了生団体VDA（Volunteers for Development Association）より、お見舞いのメッセージが届きましたので、ご紹介いたします。

全国社会福祉協議会
事務局長 松島紀由 様

VDAを代表いたしまして、2021年7月3日に静岡県熱海市で発生した地すべり災害による被害に、謹んで哀悼の意を表したいと思います。亡くなられた方、行方不明になった方、街や家がひどく破壊されたことをニュースで知りました。あらためて心よりお見舞い申し上げます。静岡県の状況が早く復旧することを願っています。

VDA会長 ソムチャイ



修了生の福祉活動の動画のご紹介

全国社会福祉協議会のホームページに「修了生福祉活動ビデオ集」というページを新設いたしました。全社協が助成した各国修了生の福祉活動の動画をご覧ください。第2回オンライン交流会でのフィリピン、マレーシアからの報告の動画もアップしております。また、ジュリエットさん（36期／フィリピン）が作成した、コロナ禍で生活が激変したフィリピンの家族が、仲間の支えによって困難を乗り越えていこうとする姿を伝えている動画も併せて公開いたしましたので、ぜひご覧ください。

詳しくはこちらから
ご覧ください。 →



YouTubeでも視聴いただけます。
「修了生福祉活動ビデオ集」で検索 🔍